
かおす・ふぁんたずむ

璃瑠@&不幸K&愉快的仲間たち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かおす・ふぁんたずむ

【Nコード】

N8840J

【作者名】

璃瑠@&不幸K&愉快的仲間たち

【あらすじ】

あ、あらすじ？……とりあえずフリーダムにやらせていただきます。 原作をブチ壊すのがモットーですw

第1話 これがカオスの始まりなの？（前書き）

こんにちは。

このたびは、こんな妄想小説を見ようと思ったあなたの気持ちに乾杯したいです。

見苦しい点、原作を知っている人が見たら不快に思う点がありましたらスルーしてやってくださいねw

では、楽しんでくださいね。

第1話 これがカオスの始まりなの？

「お兄ちゃん、お兄ちゃん！……もあ……朝だよ？学校遅刻するよ？」

朝、昨日遅くまでゲームをしていたこともあり、まだまだ寝足りない。

ゆさゆさと体を揺さ振られるが、負けじと布団を頭までかぶる。

「うるさいなあ……俺、今日学校休むわ。だるい」

そう言ってしまうと、初めて気付いた。

妹に逆らってしまった愚かさ。

家 うちの家訓にこういうものがある。

『男たるもの、女を怒らせる、又は、困らせることなかれ』

これは、今は亡き義父 おやじ が作ったもので、小さい頃からよく聞かされていた。

施設で育った俺は、この家訓の意味が最初はよくわからなかったが、今となっては身に染みて理解しているつもりだったのに……。

俺は小さくため息をつくど、すっかり覚めてしまった目をギュツと瞑る。

「レイジングハート、お願い」

『Y e s , m y m a s t e r 』

「デイベインバスター！」

「ギャアアアアア！！」

俺は、妹の“魔法”によって強制的に起こされた。

何を隠そう、家 うちの妹、高町なのはは、リリカルマジカルな魔法少女なのである。

……中学3年生の妹を、少女と呼んでいいのかは定かではないが。

薄れゆく意識の中で、幻想殺し イマジンプレイカー という異能を持った友人を羨ましく思う。

あの能力さえあれば、妹に屈しなくてすむのに。

そんなことを考えながら、俺の意識は完全に途切れた。

「お兄ちゃん！……もう、しょうがないなあ……レイジングハート」

『……Yes, master』

「お兄ちゃん。三秒で起きてくれなきゃ、嫌だからね？……」

3、2、1・・・スターライト」

「ぬあああ！！わかった、起きます、起きますから！！」

気絶して二度寝、という俺の計画は崩れた。

まあ、コイツは俺の頑丈さを知っているからな。

自慢ではないが、俺は気絶しても数秒で回復する体なのだ。

なんでそうなったか？・・・毎朝のように魔法やらなんやらをくらってたら自然に身についてしまったんですよ。

・・・なんか言ってる虚しくなってきた。

「まったく・・・お兄ちゃんは今朝毎朝妹に起こしてもらって・・・まるで子供だよ」

「はいはい。子供で結構。・・・それより、着替えるから出ていってくれよ」

「ふにゃあっ！？い、いきなり脱ぎださないでよぉ！お兄ちゃんのバカぁ！！」

俺がパジャマの上着を脱ぎ始めると、なのはは走って部屋からでていった。

兄妹なんて言葉は、思春期の女の子には関係ないらしい。

「っと、早く行かないと姉さんから何を言われるか」

俺は着替えを急いですませると、ドタバタと慌てながら食卓へ向かった。

「もう、朝から騒がしいですよ兄さん」

「ああ。悪い。少し起きれなくなてな……って、由夢が俺より先

に起きるなんて珍しいなおい」

俺は、なのはとともに食卓についてるもう一人の妹、朝倉 由夢
あさくら ゆめ の隣に腰を降ろすと目の前に準備されている料理
を見て唾を飲む。

「弟君、遅いぞ？また夜更かししてたんでしょ？……なのは
ちゃん、いつもありがとうね」

「にははは。妹として、当然の義務ですよ、音姫お姉ちゃん」

手にお盆と、その上に人数分の茶わんをのせてなのはの隣に腰を降
ろしたのは、この家唯一の良識人である、朝倉 音姫 あさくら
おとめ 姉さん。

「……兄さん、なんでさっきから私となのはちゃんを見比べて
るのかな？」

「……ん、いやあ、同じ妹でも個性があるなあと……ッ！
？」

無言のプレッシャー……ならどれだけましか。

口より先に手が出る。それが由夢の悪いところだ。

「弟君？どうしたの？そんな汗かいて」

「い、いやあ。ちょっと手の悪いツンデレに太ももをつねられてツッ！？す、ストップだ由夢！それ以上やったらマジでちぎれる！！」

身悶える俺をよそに、淡々と茶わんをそれぞれの前に置いていく音姫姉さん。

「音姫お姉ちゃん、いつものことだから。早く食べないと、冷めちゃうよ？」

「そうね。じゃあ、先に食べようか」

「いただきます」

そう言っでご飯を食べ始める二人を羨ましげに見つめて、いまだに太ももの肉を放してくれない由夢に視線を向ける。

「……………由夢。何が望みだ？」

こういう時は、機嫌をとるにかぎる。

さあ、やってやるぜ。

部屋の掃除か？庭の草むしりか？クレープでも奢ってほしいのか？

大事な太ももの為だったら、どんなことでも厭いとわない覚悟だぜ。

「・・・じゃあ、今度の日曜日買い物に付き合って」

ブイツとそっぽを向きながら、顔をほんのり赤くする由夢。

「ん？・・・そんなんでいいなら」

俺が了承すると、由夢は大人しく手を放してくれた。

むむむ。きつと買い物に行った先で色々と奢らされるに違いない。

大丈夫かな、俺の財布。

今度は財布の中身の心配をしながら、音姫姉さんが作ってくれた料理を食べ始める。

「「じーっ」」。

すると、俺を見つめる二つの視線が。

何事かと思い視線を辿ると、音姫姉さんとなのはが俺の方をジト目で見ている。

「・・・・・・・・・・」

俺はその視線をあえて黙殺し、食事を食べる手を進める。

「まあ、翠屋の方も日曜のシフトはお兄ちゃんじゃないけど……私は働いてるんだよ？」

そりゃそうだ。なのはが家　うち　に居候しているのだって、実家が経営している翠屋の名前を広めるためだしな。

翠屋というのは、なのはの母親を中心に経営している喫茶店みたいなもので、美味しいケーキが評判の店である。

ここ、学園都市に住むお偉いさんがその味をえらく気に入って、気軽に食べたいからという個人的な理由で支部まで作られたのだから驚きである。

それより、俺も一応居候なわけだが、後から来たなのはの方が俺より上の立場にいるってのは少し気に食わない。

この家の力関係を表すと、一番目に音姫姉さん。
二番目になのはと由夢。

そして、一番底辺にいるのがこの俺である。

「別にいいだろ？俺が誰とどこへ行こうが」

なのはの言葉に反論すると、それに反応したのは音姫姉さん。

「弟君、いくら相手が由夢ちゃんでもえっちなのはダメだからね？」

音姫姉さんは何を言ってるんだか……。

まかり間違ってもそんなことあるはずないよな？

俺は由夢にアイコンタクトをとろうとパチッとウインクをする。

ブイツー！凄い勢いでそっぽを向かれました。

「あ、今お兄ちゃんが由夢ちゃんに色目使った」

「お、と、う、と、く、ん？」

な、なのはめ余計なことを……しかも思い切り勘違いしてるじゃないか。

俺は小さくため息をつく。

目の前のおかずが、没収という名の理不尽で消え去っていき、俺の朝飯は白いお米だけになりましたとさ。

……くそう……なのはやつ覚えてるよ。

俺がギツとなのはを睨むと、「お兄ちゃんが今度は私に色目使ってきた」と、勘違いも甚だしい事実を音姫姉さんに報告するのは。

「弟君。なんで私だけのけ者にするのかな？」

半泣き状態になりながら黒いオーラを放つ音姫姉さんを宥めるのに時間を浪費し、白いお米すら食べる時間がなくなったことは言うまでもないだろう。

「はぁ………ったく、何か嫌なことでもあったのか？」

家を出るとき、音姫姉さんと由夢が学校に行ったのを確認し、家の鍵を閉めながら、なかなか学校に行きたがらないのはに質問してみる。

「………また、無能力者ってバカにされた」

そうやっていじけているのはの頭を優しく撫でる。

「気にすんなって言うてるだろ？……お前には似たような友達もいるんだし」

そう。なのはを含め、同じように魔法を使える女の子たちは、この学園都市では必須となっている超能力を使えないのだ。

なんでも、魔法と超能力を同時に扱うことは出来ないんだとか。

まあ、ある人の受け売りだが。

「でも、フェイトちゃんもはやてちゃんも可愛いし、男子に人気あるから……無能力でも私とは違う……」

そう言って涙目になるなのは額の、デコピンを軽く当てる。

「ふにゃあ!?!?!?!何するのぉ!?!」

「考えすぎだつてば。つか、お前も十分可愛いっての」

俺がそう言つと、なのはは「にゃはは」と照れたように笑う。

「私は、お兄ちゃんにそう言ってもらえるだけで十分かな」

先ほどより、見るからに元気を取り戻したなのはの頭をもう一度撫で、俺たちは学校へ向かう。

なのはは、度々こんな風に元気がなくなることがある。

まあ、学園都市内で魔法だの魔術だの言った日には、『こいつバカなんじゃねえの？そんな非科学的なものあるわけないじゃん』と罵られるのが関の山であろっ。

・・・超能力もある意味非科学的な匂いはするが、科学の力で“開発”できるわけだし、ある意味科学的なものだといえるわけで。要するに、科学でなんとかできる異能は認めて、科学の力で解明できないものは断固として認めない。

それが学園都市である。

まあ、そんな環境だから、能力が使えない人は少し嫌な思いをする。

なのはの場合は、それでも学園都市に居なくちゃいけない“理由”があるわけだし、落ち込んだときくらいは励ましてやらないとな。

「んじゃあな。さっきも言ったけど、何か言われてもあんまり気にするんじゃないぞ?」

俺となのはの学校は方向が違うので、いつも通り途中で別れる。

「うんっ!じゃあ行ってきます」

いつまでも手を振るなのはに苦笑しつつ、俺は学校に向かって歩きだした。

第1話 これがカオスの始まりなの？（後書き）

さて、どうだったでしょうか？

ちなみに、こ

の小説はリレー小説なので、話ごとに文章などが変わってしまう点
に関してはご了承ください。

それと、自分

はなのはに關しての知識はまったく皆無に等しいのであしからずw

璃瑠@

第2話 ウホッ！男だらけの学校パートなの！（嘘）（前書き）

なのとか二期の9話くらいでタイトルから消えたがなw w

ちなみにこの話はなのはの二期終了後（リインフォース出したいw
w）という設定みたいですw w

第2話 ウホッ！男だらけの学校パートなの！（嘘）

なのはと別れた俺は、自分が通う高校へと歩みを進めようとしたんだが……。

『タカくう〜ん！』

と、猪突猛進気味に突っ走ってくる少女、俺の幼なじみである柚原このみに呼び止められた。

『っと、このみ！なのははとくに柵川 がっこう に行つたぞ？』

『エへへ、実は寝坊してしまつたのですよぉ……』

可愛らしく舌を出して媚びるその姿は、何というか可愛い。幼なじみだからとかの鼻屑目は無く、単純に周りと比べて思つてたりする。

まあなのはや由夢、音姉たちも十分レベルが高いから、近所では良く『朝倉家には、可愛い処が集まる。これは何かの陰謀だ！』と騒がれている。

そういうこともあつて、俺は近所から凄い羨望と憎悪の目で見られていたりするのは女性陣は気付いてくれない。

ちなみに朝倉家があるのは学園都市第七学区、ここは様々な施設があつて第二十三区並の面積を持つことから移住区としても機能している。

朝倉家と柚原家も隣通しで、良く小さな時から遊んだりしていたり

する。

『そつだこのみ、今日翠屋に来いよ？久々に新作が生まれそうなんだ。』

『そうなのお！うん、絶対に行くでありますよ、隊長！』

ビシッと敬礼をして、柵川方面に向き直ったこのみは俺に手を振って再び猪突猛進に駆け出した。

アイツ、あれで強能力者 レベル3 なんだよな……。人は見かけによらない、そんな言葉を噛み締め、俺は高校への道を再び歩み出した。

φφφφφφφ

『うーっす、おはようさん。』

俺は教室に入ると、自分の席で突っ伏しているツンツン頭に声をかける。

『あ、ああ鍵原か……。おふあよ……』

眠そつに返事をするコイツは上条当麻。

俺と同じ無能力者 レベル0 の級友であり、無二の親友その1だ。

『あれ？キヨンはどうした？』

俺は姿の見えない、もう1人の親友の名を口にする。

上条は知らないらしく、再び夢の世界へ……。

『よう鍵原。キヨンなら涼宮に連れてかれてたぜ?』

つと、俺に話しかけてきたのは谷口っていうお調子者な級友。入学式のあとなんとなく仲がよくなった。

『また涼宮か……キヨンの奴、よく変わったのに絡まれるな……』

『その変わったのに俺達も入るのかにや?』

『だしたら結構ひどくないですかあ?なあ土御門くん!』

『ぜよ、カギヤン。それにカギヤんにカミヤンも変わったのに含まれるにや』

この突然現れて失礼なことを言い出した青髪の長身と金髪サングラスは青髪ピアスと土御門元春。

学校ではこれに上条を入れた、【クラスのバカデルタゾーン】などと呼ばれている。

たまにこれに俺とキヨンが混ざること【ペンタゴン】と呼ばれることもあるが、かなりの名誉毀損だ。

『カギヤン、今さっき失礼なコトを考えなかったかにや?』

キラリとサングラスが光る土御門、たまにコイツの勘の鋭さに脱帽する。

別に、とはぐらかし、俺はトイレへと逃げ込むことにした。

φφφφφφ

『しかしキョンも良く付き合ってられるよな……古泉だって、能力高いクセにわざわざ転校までしてきてるって言うし……』

とりあえず一服して教室に戻ろうと考えた俺は、宣言通りトイレに行っていた。

涼宮……涼宮ハルヒの挙動にキョンはよく付き合っている。

話を聞くと、自分の撒いた種だからと何やらため息をついて落ち込んでいたっけね。

まあ話しかけるようにけしかけた俺や上条も悪いとは思うが、涼宮もキョンの後ろの席というのもあってキョンに話しかけることが多かった。

キョンはとても聞き上手な奴だ、それは中学で一緒だった俺が一番知っている。

だがそれがたまに災をもたらすというか……。

『っと、大丈夫ですか？……って古泉か』

『おや、その言い方は些か傷つきますね……僕も人の子ですよ？』

トイレから教室へ戻ろうと外に出ると、突然何かにぶつかる。

ぶつかった相手は何気に知人だったりしたわけで。

この爽やか笑顔を振りまくのは古泉一樹、いつだったか転校してきたイケメン。

紹介が適当とか言うなよ、的を得た簡単な紹介なんだからな。大体、強能力者 レベル3 の奴がこんな普通の学校に転校してくるなんて、有り得ないしな。

『お前今来たって訳じゃないよな？お前も部室か？』

『ええ、朝早くに涼宮さんから集合とのご達しがありました。』

苦笑しても絵になるってどうよ？

俺は教室に戻るといふ古泉を見送り、自分のクラスに戻ることにした。

φφφφφφφ

教室に戻ると、窓際の2つの席に居る2人が視界に入った。

なにやら後ろのが一方的に話し込んでるみたいだが気のせいにしておこつ。

俺は自分の席について、朝の予鈴がなるのを待つことにした。

第2話 ウホッ！男だらけの学校パートなの！（嘘）（後書き）

反省点いっぱいww

今回色々と描写さばり気味……つか璃瑠の書き方できねえ↑

今回、女性キャラが1人しか出てない……死活問題か？ww
あと国木田出ないのはたまたまですよ？ええ、別にめんどくさかったわけじゃない↑

で、まず反省点

- ・更新遅れましたorz
- ・関係者及び楽しみにして下さっていた読者のみなさんにお詫びを
- ・短すぎましたねwwだってめんどくさかつt
- ・ぷえー↑↑↑

さて、いい感じのグダグダで締めますかね↑
では、次の私の更新日までwwノシ

2月18日 伊坐薙

第3話ロリコンと魔女とピザなの！（前書き）

えっと・・・まず1言言わせてください。

カオスww

マジでどう繋がれば良いのか分かんなくてとりあえず書いてみました。

まあ題名が題名だし良いよね？w

多分これ以上作品は増えないと思いたい（希望！？）

皆さんの要望あれば見当するかも知れないので感想ついでに出て欲しい作品書いて見てはいかがでしょう？まあそれで増えれば更なる混沌へw

第3話ロリコンと魔女とピザなの！

ここはキヨン達のクラスのすぐ隣のクラス、比較的頭のいい人間がいるクラスである。

しかし・・・

「おいＣ・Ｃお前学校でピザを食べるなど言っているだろう！」俺の名はルルーシュ・ランペルージ、このクラスの学級委員長をしている。「何だルルーシュ？この学校の規則にピザを食べてはいけない何てルールでもあるのか？」この女はＣ・Ｃ、ピザとチーズ君（ピザ屋のマスコットキャラクターのような物だ）をこよなく愛する女である。

「常識で考えろ！どこに朝から学校に登校して真っ先にピザを食べる奴がいる！！」「ここにいないだろう？」

この魔女が・・・この女に誰か常識を教えられる奴はいないのか？「ま、まあまあ落ちついてルルーシュ君、Ｃ・Ｃさんにも悪気はないと思うし・・・ね？」そう話の仲介に入ってきたのはこのクラスの女子の学級委員長小牧愛佳である。引っ込み思案ではあるが仕事は最後までやる努力家であり、いつも委員会の活動は彼女と行っている。

「小牧さん、こいつを甘やかすところな事にならないんだ、ここで釘を刺さなきゃいけないんだよ。」

「そ、そうかな？うーん・・・そうなのかな・・・」「ルルーシュの言葉信じるな小牧！」信じてはいけないのはお前の言葉だ、まったく・・・朝からこんなに疲れるとは、俺が頭を抱えていると・・・「ルルーシュ先輩！おはようッス！！」

の言葉と共に後ろから抱きつかれる、ハア・・・次から次へとイベ

ントが起こる日だな今日は。

俺は後ろを振り向きそのイベントの根源に話かける、「もう少し静かな挨拶はできないのかチエ？」

「ええーいいじゃないですか先輩、あたしは朝は先輩とこのみに挨拶するのが日課なんですよ？」

失礼、紹介が遅れたな、彼女は俺の後輩の吉岡チエ、とある事件がきっかけで知り合った元気がいい後輩なのだが

もう少しテンションを下げてもいいのではないかと思う俺がいる。

「よつち、今日は日直。」そしてチエの後ろに控えているのは山田ミチル、チエとは正反対の性格の後輩である。

「やば！そうだった、じゃあ先輩また来るッすね。」「ああ、またな、ミチルも。」

「はい、ではこれで。」そういうと二人は教室から去っていった。やれやれ、まあこれ以上イベントは起こらないだろう。そう言ってカバンから教科書などを出している時。

「……ない。」「ん？どうしたルルシユ、忘れ物？」すると隣から友人のリヴアルが話かけて来た。

「ああ、……弁当を忘れてしまった。」「マジで？そりゃあ災難だなルルシユ。」「まったくだ……困ったな。」

「へっへっへ、お前に罰が当たったんだよ。」さらに後ろから友人である雄二が話かけてきた。

「罰？何の事だ？」すると雄二は「決まってるだろ！お前がモテてるからに決まってるじゃねえか！！」

まったく……何を言い出すかと思えば、また雄二の戯言が始まったな、それはスルーするとして。

「仕方ない、今日は購買で済ませるか。」そんな事を考えていると・

・

「お兄ちゃん、お弁当忘れてたよ、はいこれ。」ああ・・・今俺は感動の嵐に吹き荒れている・・・ごほつごほつ！
失礼、我を忘れていたな紹介しよう、俺の妹のフェイトだ。

「ああ！フェイト、こんな所までありがとう、誰かに触れられなかったか？触れた奴はこの世界から追放してやるからな。」「うんうん、大丈夫だよ。いつもありがとう、お兄ちゃん。」ああ・・・こんな幸せでいいのか。

そんな気持ちを体感していると「このロリコンめ・・・」はっ！しまった皆が俺の方を見ていた。

C.Cめ・・・俺は決してロリコンではない！！そんな事よりも、この状態をどうにかしなければ・・・

「フェイト、教室に帰らなくて良いのか？もうすぐ予鈴が鳴るみたいだぞ？」「あ、本当だ。じゃあ行くねお兄ちゃんまたお昼にね。」
そういうとフェイトは自分の教室に帰って行った。

さて・・・どうしたものかな、「おいロリコン、弁解するのか？しないのか？」

「ピザのタダ券はいらないから捨てるか・・・」「ルルーシュはロリコンなわけないな！、うん。」

フン、まず一人か・・・その後ルルーシュは皆に同じような戦略で地位を確立した。

ああ・・・昼休みが楽しみだ。

第3話ロリコンと魔女とピザなの！（後書き）

えー・・・ルルーシュファンの皆様、申し訳ありませんw w

えーっと、今回はナナリーは妹にしたら普通だと思ひまして第1話でなのはが妹だからフェイトちゃんをw wいやあフェイトちゃん可愛いよね、うん。

まあ皆力オスだったので自分もいいよねw

ではまた自分が書く時にお会いしましょううそれではw

b yメイト

第4話 友とシスコン（前書き）

こんにちは。璃瑠@です。

話繋げるのむ

ずしいw w

まあ、とりあえず暖かい目で見てやってくださいw

第4話 友とシスコン

「えつとお、今日は朝から全校集会があるので体育館に集合してくださいね」

教室へ入ってくるなり、その言葉を発したのは我らが担任、月詠小萌 つくよみ こもえ 先生である。

「……………はあ、だるいなあ」

俺の前の席で、当麻があからさまにため息をつく。

馬鹿め。そんなことを言ったら……………。

「……………上条ちゃん？先生と少しお話ししましょうね？」

ほらね。当麻は、えらく小萌先生に気に入られてるからな……………
べ、別に羨ましくなんてないけどっ。

「……………鍵原、助けてくれ」

「自業自得だろ。頑張れ」

ほら、早く行かないと小萌先生が可愛そうだろうが。

俺は当麻の背中をポンツと叩き、見送る。

当麻のため息を無視しつつ、俺は体育館へ向かおうと立ち上がった。

近くの席の土御門と合流し、二人でダベりながら教室の入り口まで足を進める。

「ま、待てっ！二人とも置いてくグヘッ！！」

キョンが涼宮に制服の襟を掴まれて藻掻いているが、これもまた無視無視。

「カギヤんも薄情だねえ」

「お前もだろうが」

俺と土御門は、苦笑しながらその場を後にした。

「おっと、悪いな」

体育館の入り口で見覚えのある顔にぶつかった。

「……皇子様　プリンス　か」

音姫姉さんたちが噂をしていたのを思い出す。

まるでどっかの皇子様のようにイケメンで性格もいい。おまけに頭もよく、全男子の敵のようなやつがいると。

「……そのあだ名は嫌いではないが、俺にはルルーシュ・ランペルージという名前がある。できればルルーシュと呼んでほしい」

「……土御門。なんか絡まれたんだがどう対応すりゃあいい？」

「ん。カギやん。とりあえず挨拶しとこうぜえい。・・・っと、俺の名前は土御門元春だにや。土御門、もしくはつつちーって呼んでくれよん。ルルーシュ君」

「ああ。土御門君。よろしく」

・・・二人が握手を交わしているが、こつも見栄えが違うのはなんでだろうな。

「んで、こつちのイケメンに嫉妬しまくっている小心者がカギやんこと、鍵原貴路だぜい」

「誰が嫉妬してるって？そりゃあ土御門の方だろうが、この非リア充」

「にやはは。カギやんも十分非リア充の仲間だにゃあ」

「うるせー！家　うちの妹みたいな笑い方すんなよ、気持ち悪い！」

そんな俺と土御門のやりとりを見て、ルルーシュが小さく笑う。

「ふふっ……面白いな二人は」

「面白いのはコイツの顔だ（にや）」

「……今は恥ずかしい。よりにもよってこんなやつとハモるなんて。」

「クツクツク……やはり君たちは面白いな」

ルルーシュは、笑いを噛み殺しながらも、目に涙をためて笑いだした。

なんかコイツ、思ったより良い奴そうだな。

「お兄ちゃん!」

アレ？この声は……。

俺はどこかで聞いたことのあるような声に首を傾げつつ、声がした方を振り向く。

「…………ツツ!？」

と、同時に大きく目を見開いた。だってアレは……………。

「……………フェイト・T・ハラオウン」

「ん？鍵原君は、フェイトの知り合いなのか？」

俺の眩きを聞いたルルーシュが、ジトツとした目で俺を見る。

「…………いや、たぶん勘違いだ。すまん、まだ寝呆けているみたいだ」

そうは言ってみたものの、ルルーシュと仲睦まじく会話をしている女の子は、俺の妹のなのと同じ学校に通っている女の子と“瓜二つ”なのだ。

さらに言うと、この女の子の名前もフェイト。なのはの友達の名前もフェイト。

一体何がどうなってるんだ？

「そつだフェイト。紹介しよう。今知り合いになつた土御門君と鍵原君だ」

ルルーシュが俺たちを指差しながらそう言つと、女の子は金色の髪を揺らしながら、俺と土御門にペコツと頭を下げた。

「フェイト・F・ハラオウンです。兄と友達になってくれてありがとうございます」

その自己紹介は、俺を迷宮のドン底へと突き落とした。

（名前も同じかよ……）

訝しげな表情をする俺をどう見たのか、ルルーシュが注意を促すように目を鋭くする。

「鍵原君。俺の妹に手を出すなんて考えてはいないだろうな？」

「……俺に幼女を愛でる趣味は少ししかねえよ」

「カギヤん……少しって、それだけでも十分犯罪臭がするに

「や」

俺の言葉を聞いたルルーシュは、ニヤリと不適な笑みを浮かべながら手を差し出してきた。

「君も妹の良さがわかる同志だったか。これから、仲良くなれそうだ」

・・・なんか今の一言で皇子様のイメージが砕けた。

「いやあ、妹はいいよねえ。実は俺っちも妹がいてさあ」

やべえ。土御門の妹自慢が始まった。こうなった奴はなかなか止められないんだよな・・・。

そんな土御門と普通に会話をしているルルーシュの笑顔を見ながら、少し苦笑する。

（なんだ・・・皇子様って言われてるけど、普通のちょっとシスコンな男子じゃん）

俺がルルーシュに抱いた第一印象はそれだ。本人には失礼かもしれ

ないが、俺の中での評価は割と高い。

「じーっ」

ルルーシュの妹、フェイトが俺を見ている。なんか朝にも似たようなことがあったな……。

「な、何かな？」

周りの生徒がどん引きするような会話をしている二人から少し距離を置き、フェイトに話し掛ける。

「鍵……原さん？」

「ああ。貴路でいいよ。嫌なら鍵原でもいい」

「それじゃあ……貴君？」

「……あ、ああ」

不覚にも可愛いと思ってしまった……このみとはまた違った

破壊力があるな・・・。

「貴君は、本当のフェイトを知ってるんだね？」

本当の？・・・何を言ってるんだこの子は・・・。

「やっぱり、知ってるんだ・・・あの、出来れば私のことは、フェイトには内緒にしていほしいんだ」

フェイトは懇願するように俺をじつと見つめ、ギョツと唇を噛んだ。

「・・・・・・・・・・わかった」

こんなに必死で頼むのだ。きっとそれなりに理由があるんだろう。

誰にでも知られたくない秘密はある。もちろん俺にだって。

人の秘密をペラペラと喋るほど、俺の口は柔らかくないからな。

俺の返事を聞いたフェイトはホッとため息をつき、ニコツと笑うと、俺の首に腕を回して抱きついてきた。

「ちょッ!？」

俺は倒れないように足を踏張らせながら、フェイトを支える。

「私の、本当の名前はアリシア・テストロッサ。貴君からは、“魔法使い”の匂いがするからね……。二人だけの秘密だよ?」

魔法使い、と言う単語にハッとなる。それを知っているということとは、学園都市側の人間ではないということだ。

……。まあ、いまさら驚いたりはしないが。

フェイト……。いや、アリシアは俺から離れると、ササッとどこへ走っていった。

……。どうやら、ルルーシュは土御門との会話に夢中で今の出来事を見ていなかったらしい。

俺は小さく安堵のため息をつく。

シスコンは、妹のことに关联すると恐ろしいからな……。

「さて、そろそろ並んだほうがいいか」

土御門とルルーシュに一声かけてクラスの列に並ぶ。

俺と土御門の後ろに、キヨンと当麻が並んだ。

「……不幸だ」

そう言って大きくため息をつく二人の肩を軽く叩き慰めていると、全校集会が始まった。

俺は欠伸を一つして、校長のつまらない話に耳を傾けるのだった。

第4話 友とシスコン（後書き）

さて、なんとか話を繋げてはみたものの・・・なんというか・・・カオスの一言に尽きますw w
やっぱりなのはキャラが良くわからないのが痛いですねえ・・・
まあ、そこはスルーしてくださいw
ではまた次の機会に。

璃瑠@

第5話 かおすな春の女の子祭り（前書き）

時代は春……春休み近いと勝手に設定 W W

第5話 かおすな春の女の子祭り

さて、長い長い校長のお話を右から左へと見事に聞き流し、帰宅だあーと教室に帰るとき、校庭で揺れるピンクのリュックサックとツインテールが俺の視界に入った。

俺としては早く帰りたいので、その姿を見なかったことにしようと真っ直ぐ教室への歩みを進めたのだが、如何せん、回り込まれてしまった。

ったく、面倒なことが嫌いだからとキョン達とは別れたのに……

「八九寺、なんでお前がうちの学校に我が物顔で居やがる！つか視える奴に会ったらどうするつもりだ！」

ポカンと頭を殴るとその場で頭を押さえて悶絶する少女、名を八九寺真宵、俺が夏に出逢った、否出逢ってしまった【蝸牛に迷った少女】だ。

「失礼ですね、私こう見えてかくれんぼで見つけるの得意なんですから！」

「関係ねえよ！つか普通それなら逆を言うべきだろうが！」

八九寺とは出会う度に口論になり、終いにはストリートファイトに発展する。

今も既に臨戦態勢、2人の間に言葉はいらない状態だ。

「鍵原さん、今日の私はお腹が空いていますよ？」

それはいつもだろ、と心でツツコミをいれる。

「だったら帰りに翠屋に來い、新作食わせてやるから」

その言葉に八九寺は目を輝かせ、早く出てきてくださいねえ！とか言いながら手を振ってその場をあとにした。

あんなのに昔かき回されたかと思うと、何か自分が情けなくなってくるが……。

大きなため息を一つはき、教室への道を急いだ。

φφφφφφ

「はぁーい、今日はここまでえ、みなさん、春休みだからといって羽目を外しすぎないように、いいですねえ？それじゃ委員長ちゃん、号令をよろしくなのですよお」

我らが小萌先生の号令の元に、これまた我らが委員長こと朝倉涼子の号令によって今日の学校は終了した。

さて、このあとは翠屋に行って腹ペコちびっこーずを満足させてやらなければ……。

そう思い教室を出ようとしたところで、嫌な予感が――

「鍵原貴路い！私と勝負しろお！」

よく通るでかい声をまぁ……つかはしたない。

「いい加減にしとけ由真。そろそろ止めないと、マジで痛い目にあうぞ?」

「うつさい!私はなんとわれようとアンタをぶっ倒す!」

またそんなはしたない言葉……。

さて、察しがいい皆様ならわかるだろう、この勝負勝負と五月蠅いのは十波由真といい別クラスのクセによくこちらのフロアに現れる曲者。

「誰が曲者だあ!」

人の心を詠むなんて、お前は悟りに目覚めたのか!?

「とにかく勝負——って逃げるなあ!」

逃げるなど言われて、ハイわかりました、なんて言う人間が居たら、それは間違いなく人間では無い。

「悪いな?ちよつち急ぐ用事があつてなあ、不戦勝でも何でも好きにカウントしてくれ。」

由真のほえる声なんて気にしない。
俺は八九寺の待つ正門へと急いだ。

φφφφφφφφ

ところ変わって翠屋——

「ウィーッス、繁盛してるかあ——」

店に入ると、そこにはグツタリする我が家の魔王と猫被り、カウンター前の席には、いくつもの皿を横に積み上げ、今尚皿を増やしている白いシスター。

なんなんだ、この戦争跡地……あーあ、八九寺も俺の後ろに隠れちゃった。それほどまでに凄まじいのだ、この惨状は。

「ん？おかえりなんだよタカミチ。あれ？今日はマヨイが一緒なの？」

オイ、インデックス、口の周りにべったりチョコやら何やらが付いてるんだが、シスターとして大丈夫か？
しかも、何だその【今日は】ってのは……。

ああもう、由夢となのはがこっちみてんじゃねえーか、こっちみんな！

「なんやあ、相変わらず騒がしいなあ」

「なんでお兄さんの周りには女の子ばかり……」

更に奥から子狸と死神が——

「貴くうーん！最速最高のスピードでやってきたよお！」

と更に突っ走る幼なじみまで現れる始末……。

女の子比率割高の翠屋、春の陣開幕です——

第5話 かおすな春の女の子祭り（後書き）

お腹が鳴くから帰ろぉ、まっすぐお家へ帰ろぉ

【蝸牛に迷い込んだ少女】参上ww

本編張りの絡みは無く、あくまでナチュラルな年下の友達……として出してみました。

段々主人公がアララギになってるのは気にしない↑

気が向けばガハラさんや神原なども出すかもしれないです……まあ先に出されるかも知れませんがねww

では次回の嘘予告↑

「火憐だぜ！」

「月火だよ！」

「なあなあ月火ちゃん、知ってもいないことを知ってる風に話すのを知ったかぶるっていうけど、あれ、たかぶるの使い方合ってるのかな？」

「うーん、どうだろ…今度お兄ちゃんに聞いてみようよ」

「そだな、でも兄ちゃんも意外と知ったかぶる……とここで予告編クイズ！」

「唐突だね！」

「今アタシは何を考えてるでしょうか？」

「凄い難問だよ！」

「んじゃ次回のかおす・ふぁんたずむをよろしく！」

あとがきの方が生き生きする作者
↑

2月27日 伊坐薙

とある魔王の放課後（前書き）

えゝ更新遅くなつてすみません！！

就職活動で全然執筆活動ができなくてw

その分ちよつと長めに書きました、どうぞ御楽しみください。

とある魔王の放課後

さて・・・そのころどこぞの魔王のクラスはというと・・・

「ピザはまだか？足りないぞー！！」「畜生！なんで・・・なん
でルルーシュばかりもてるんだよー！！」

「まあまあ、これでも飲んで・・・」「ちょ、ちよっとリヴァル君
！お酒は駄目だよ。」

何だこれは・・・一体この惨状は・・・どうやればここまで酷い事
になるんだ。

それは2時間前・・・

それは今日の放課後の事である。

「はぁーい注目！！今日はパーと騒ぎたいと思いますー！！」

俺は帰る準備をしていたらいきなり聞き覚えのある声で変な宣言を
している人がいた。ミレイ会長である。

会長は俺達とは1年上の上級生の先輩である。まあ俺とは俺が1年
生の時からある事件がきっかけで知り合いになったんだが、その会
長がいきなり何か言い出すことには何か裏があるとしたか思えない俺
は早急に退散しようとするのだが・・・

「ルルーシュを確保！！！！」

その瞬間全員から退路を塞がれ拘束までされるのに2秒掛からない

手際の良さ・・・会長め、これを想定していたか！！

「みんなご苦労様、さてルルーシュ。これが何か分かる？」何だ？物で釣るつもりですか会長？そんなもので俺は・・・

「ふわああ！！」な・・・これは我が最愛にして俺の女神であるフエイトの生写真！！！！

「会長・・・これをどこで？」それは企業秘密、今なら笑顔でどアップの写真も・・・」「さあて行きますか会長！！どこでやるんですか？」俺は馬鹿か！！しかもう後には引けない・・・「うんうんそれでこそルルーシュよね。」

場所はここの近くのお店貸し切ったからそこでやるわ。」

そして会長の指示で皆でそのお店に行ったのだが・・・

「で・・・これがしたかったんですか会長？」ん？まあこれは序の口よ、序・・・の・・・口。」

やれやれ・・・これで序の口だと？学生にお酒飲ませるのがか・・・まったく困ったものだな。

「さて・・・とそろそろ始めようかしら。皆注目！！注目！！！！」

「さて、盛り上がってきた所で王様ゲームをしまーす！！」

な、何だと！？これが会長の真の狙いか？くっ！まさかこんな・・・どうすればいい？

「はぁーいルルーシュから引くのよ、」ちいい！！この辺も抜かり無しか！まあ良い、俺が王様になれば良い。

結果は・・・

5番か・・・まあ王様にはなれなかったがとりあえずあとは選ばれ

なければ問題はない・・・

「さあーで、もちろん王様は私、ミレイ・アッシュフォードです！」
な、何だと！これはまさか・・・俺の引いた番号を
読まれているのか？それならばまずい！このままでは・・・

そのころ他の生徒たちは・・・

「おいおいどうするよ？これでもしも俺が女の子と一緒に・・・計
り間違つて委員長とキスとかになったら・・・」

それは無いと断言します。「なんでだよ！！」なぜなら雄二がそう
いうキャラだからです。「ひでえいわれ方・・・」

「（どうしようどうしよう！ルルともしもキ・・・キスする事にな
つたりしたらで、でも！これは合法的にやった事だから良いよね？
良いよね？）」「これは合法的といえるのか？

「（どどどどうしよう？もしも男の人と何かしなきゃいけなくなつ
たら私・・・どうしようー！）」

逆に私は楽しみですw。

「（ピザピザーっ）」「ピザと水分あればCは生きられるのでは
ないでしょうか？

「では発表します！・・・まずは3番の人！そして・・・」よし！
このまま行けば俺は安心だが・・・

「5番の人！」な、何だと！！やはり仕組まれていたのか・・・と
いうか3番は誰なんだ？

「その二人は・・・皆の前でポツキーゲームをしてもらいます！！
！！」

「「イエエエーーーーーイ！！！！！！！！！！」」

な！・・・馬鹿かお前ら！！俺がポツキーゲームだと？あり得ない！俺はフェイト以外断じて認めないぞ！！

だいたい誰だ相手は？

「3番は誰かしら？」

「・・・あたしだ。」

シャーリーだと？いや・・・確かにシャーリーは可愛い、可愛いが・・・て俺は何を言ってるんだ！冷静になれ俺！

「ルル・・・。」

「な、なんだい？シャーリー・・・。」

「ルルだし・・・や、やらないと・・・ね？」「あ、ああ・・・そうだな。」

まずいこのままでは！！俺がシャーリーとカップルに認定されて・・・最後は・・・何を想像している俺！！！！

しかし否定しながらもルル・シュはポツキーゲームへと一步一步進んでいる。

「じゃあ御二人さん、準備はいい？・・・それではどうぞ！！」

「行くよ？ルル。」

「ああ・・・。」

そしてそれからは皆沈黙して二人のポツキーゲームをまじまじと見ていた・・・

そしてもうポツキーが半分を過ぎていた頃二人の心臓が高鳴っていた。

「（もうすぐ・・・もうすぐ唇が触れちゃう！どうしようどうしようルルの顔がこんなに近いなんて・・・）」

「（フェイト・・・ここでファーストキスをするお兄ちゃんを許してくれ・・・）」

すると・・・

「お兄ちゃん！、ここにいろつて聞いて来ちゃった♪」

「ぶふおあ！！！」ポキッ！

いきなりの最愛の妹の出現に途中でポッキーが折れてしまった。

「？どうしたのお兄ちゃん？シャーリーさんと何してたの？」「いや！何でもない！何でもないんだよフェイト、ハハ！ハハハ！フハハハハ！！！」とりあえず助かった・・・言いかたはシャーリーに悪いがな。

「（ルルとのキスまであと少しだったのに。ハア・・・）」

「それじゃあふにおちないみたいなのでもう2回ぐらい行くぞぉー！！！！！」

「もう・・・もうやめてえっ！！！！！！！」

まだまだ放課後は終わりそうにない様だw

とある魔王の放課後（後書き）

えゝ何かグダグダになりましたねw

やっぱ鈍ってるのかな？と自分で思いました。

まあそろそろ新キャラ自分は出そうと思ってますので期待をw

しかし最近自分よく泣くんですけど涙腺緩くなってるのかな？
そういう事でまた自分の番の時にお会いしましょうゝ

第7話 白い悪魔（シスター的な意味で（前書き）

色々とグダグダサーセンw w

グダグダ病なんで許してください（殴

やっぱ前の忘れてたから、結構書くの大変でしたw

作者は今、

第7話 白い悪魔（シスター的な意味で

「うしっ！今日のゲストのこのみさんも来たことだし、俺の新作を発表しちゃおうかな！」

俺はそう言い残して、意気揚々と翠屋のキッチンへ向かった。

まずはエプロンに着替えないといけないのだが……なぜか後ろに八九寺が着いてくる。

まあ、八九寺が見えるのはインデックスだから何も言われなかったのだが。

「……かぎふあーさん」

「俺は鍵原だ！わざと噛むなよ！」

「すみません。かみまみた」

「わ、わざとじゃない!？」

そんなやりとりをしていると、いつの間にか自分用のロッカーの前に到着していた。

「おい八九寺。俺は今から着替えるんだが」

「どうぞどうぞ。私はそれを見えています」

「お前は変態か!？」

「いえ、私は変態ではなく、むしろ紳士です。変態という名の紳士ですよ、鍵原さん」

「……どうやら、何を言っても聞いてくれないみたいだ。

まあ、俺としては八九寺が居ようがいまいがあまり関係ない。

見た目小学生のコイツに裸を見られてもなんとも思わないからな。

俺は八九寺の視線にめげないように頭の中で素数を数えながら、服を次々と脱ぎ捨てていく。

食べ物を扱う仕事だけあって、服装についてはかなり厳しいのだ。

制服の上からエプロンを着てキッチンにあがった日には、なのはからどんなお仕置きをされるか解ったもんじゃない。

「・・・・・・・・・・っと、紐結んで完了っ」と

俺は、翠屋のウェイター件調理スタッフの正装であるエプロンの紐をグツと結び、首をコキコキと2、3度鳴らす。

「さあて八九寺。行くぞお・・・・・・・・・・って何してるんだ？」

八九寺は、顔を真っ赤にして口をパクパクしながらボーツとつつ立っていた。

むむむ。小学生には刺激が強すぎたか？

「・・・・・・・・フランクフルト」

そう呟きながら、フラフラとこの場を後にする八九寺。

俺は首を傾げつつ、新作をいち早く作るために、キッチンへと急いだ。

「やはは……これ、何なの？」

時間帯的に客入りなのか、ドタバタと忙しそうに働いていたのが俺の新作の前で足を止めた。

「むっふっふ……俺特性、名付けて、『赤い彗星パフェ』だ！」

「ババーン！」と効果音を出しながら、俺は渾身の作品を手で示した。

「確かに赤いけど……彗星って？」

「ん、通常の3倍って意味。まあ、スターフルーツが入ってるって意味もあるけどな」

俺の言葉がいまいち理解できないのか、なのはは苦笑を浮かべながら自分の仕事へと戻っていった。

俺はネタがわかってもらえないことに少しショックを感じながら、倒さないように、慎重に『赤い彗星パフェ』をこのみの元へ運ぶのだった。

「うわぁー！貴君、これって、あの某ロボットアニメの赤い彗星にかけてるんだよね？」

俺が作品名を言うと、このみはすっかりわかってくれた。

「さすがだな！よしよし、いい子だ」

なでなでとこのみの頭を撫でると、このみは気持ち良さそうに目を細めながらニコツと笑った。

犬みたいだな」と苦笑しながら、「食べてみてよ」と、今度は味の評価を期待しつつ、このみの言葉を待つ。

「・・・・・・・・わぁ、美味しい・・・・・・・・」

俺は、そんなこのみの言葉だけで満足できた。

さすがに一人では多い量なのか、腹ペコ八九寺と猛獣インデックスにパフェの殆どを食べさせていたのは少し残念だったが。

「・・・・・・・・タカミチのフランクフルト？」

パフェを食べ終わって客の足も少し緩み、店の中がまったりした雰囲気になりつつあったその空気を、ものの見事にインデックスの一言がブチ壊した。

意味深なその一言は、この場にいる、小学生脳の持ち主であるとい
ンデックス以外は皆さんが理解してしまっているだろう。

「にやわわわわ！いい、いいいいインデックスちゃん！そ、それど
ういう意味かわかって言ってるの？」

キッチンから出てきたのはが、チラチラと俺の方を見ながらイン
デックスに問うている。

インデックスはコクツと首を横に傾げながら、俺に視線を向けた。

「マヨイが、タカミチのフランクフルトが大きかったって言うてる
んだけど………フランクフルトはフランクフルトだよね？」

何をおっしゃってるんですかこのエセシスターさんは。

「た、たたたた貴君！ま、まよいちゃんって誰なの？」

「兄さん……そういう事する相手いたんだ……」

このみはテンパリすぎ。

おい由夢。店の割り箸は折って使うものじゃないぞ？資源の無駄じゃないか！ビバエコロジー！

「お兄ちゃん………お店が終わったら、少しお話し、しようか？」

「そやなあ。わたしもそのお話し、付き合っわあ」

「そうですね。じっくり、お話しする必要があるみたいですね……」

おいおいおい。魔女っ子三人娘のお話して何なんだ？俺に死ねって言ってるのか？

「ふ……不幸だ」

俺はガツクリと両膝をつきうなだれる。

それもこれも、全てインデックスが悪いんだ。当麻に言いつけてやる！

んで、フランクフルトの意味を聞いたこの件の発信源であるインデックスからは何故か頭を噛まれた。

理不尽すぎるだろ……。

こういうのは、当麻の役目じゃないのか？

俺は先の見えない真っ暗な未来に、大きくため息をついた。

……その頃、上条さんは別の不幸に見舞われていたとい
なかつたとか。

第8話 それぞれの思い Each Feeling (前書き)

タイトルが何か真面目ですな W W

ていつか急展開 W W

第8話 それぞれの思い Each Feeling

side当麻

「ちょっと、待ちなさいよ！」

とある通学路で、中学生くらいの少女が、黒いツンツン頭の少年に突っかかっているという奇妙な光景があった。

いや、彼ら彼女らの中では何でもない、日常茶飯事な光景だった。

「あーもう、なんだよビリビリ？上条さんはスーパーのタイムセールに間に合うか間に合わないかの瀬戸際で——」

刹那、蒼白い光が上条当麻の頬を掠めていった。

学園都市第三位、超能力者 レベル5、【超電磁砲】、常盤台中学のエース、御坂美琴が放った一撃だった。

「誰があ、ビリビリだってえ？」それは中学生の少女が普通では出来るはずのない、般若のような顔だった。

上条は思っ、何故自分はこうも女の子に恵まれないのだろうと。

他の人間（主に男連中）からしてみれば贅沢な悩みだろうソレは、

上条にとっては本当に深刻な問題であることに違いは無い。

やれ大食いなシスターやら腕っ節おでこDXなクラスメイトや曰く付き能力のクラスメイトや目の前のお姉様ラブな風紀委員やこのビリビリ電撃お嬢様など…… ホントに濃い連中ばかりなのだ。

「（ああもう！！コレで毎回青髪とか土御門とかから追い回されるだから、どこに羨ましい要素があるんですかあ！？）」

そんな上条に、不穏な影が近付いていることなど、分かるはずもなかった…………。

φφφφφφφφφφ

side貴路

フランクフルトの件は消し炭にされ、【翠屋】の閉店時間が迫っていた夕方。

俺の携帯に一通のメールが届いた。

「今日の18時、いつもの場所に来られたし……………か、面倒なことが次から次へと……」

俺のその言葉聞こえたのか、インデックスに今日の散歩で見たもの

などを話していた八九寺が此方をジッとみていた。

仲間にしますか？

・はい

・いいえ

「何故そこでDQM風なんですか！私はスライムつもりとでも言いたいんですか？！」

いや、八九寺、お前は直ぐに噛み付くからガップリンかアンドレアルだ。

がうつつう！などと威嚇をしてくる八九寺を宥めて着替えようと中に戻る。

「（ここからは裏の仕事だ、お前らを巻き込むわけにはいかない…
…）」

俺の携帯には、先程送られてきたメールが開かれていた。

差出人の名前には——海原光貴と表示されていた。

φφφφφφφφφφ

side 一方通行

学園都市第一位、超能力者 レベル5 の一方通行【アクセラレータ】は首を鳴らして時が来るのを待っている。

別に彼女と待ち合わせをしているわけではない、別に告白の呼び出しを受けたわけでもない、ただ指示された場所へと足を運んだに過ぎないのだ。

彼は近代風に作られた杖を片手で突きながら、自販機へと近づく。

「あのグラサンがア、いつまで待たせやがる！」

一方通行が呼び出されてからかなりの時間が経っていた。

彼はいつも一緒に居る小さな少女——打ち止め ラストオーダーと共に一応の保護者である黄泉川愛穂の教職員用のマンションでまったりと過ごしていた所への連絡だったのだ、彼が機嫌を悪くするのは必然かもしれない。

缶コーヒーを買って、待ち合わせ場所である公園のベンチに腰をかけたところで、大きなキャンピングカーが入り口に止まった。それと共にまるでタイミングを見計らったのように、サングラスにアロハシャツの上から学生服を着た軽薄そうな少年、肌を露わにし胸をさらして巻いたツーテールの少女、黒曜石を徹底的に磨いて作られたナイフを隠すように持った茶髪の青年、ダルそうにタダダルそうに欠伸をしながら現れた少年、が一同に集まった。

ケツ、と唾を吐き捨て、缶コーヒーを一気に飲み干すとくずかごへと投げ入れた。

彼らの名前は『グループ』、学園都市に存在する裏の組織……。

φφφφφφφφφφ

side当麻

上条当麻は何かに気づいたのか、美琴の手を引いて茂みへと隠れた。

刹那、ビュン！と、さっきまで上条たちが立っていた場所に何かの当たり地面を砕いたのが見えた。

美琴は何が起こったのかサッパリといった感じだったが、上条に手を引かれたという事実気づくと狼狽えていた。

上条はそんな美琴の様子などなんのその、無い頭で色々と考えていた。

「（いきなり狙ってきたよな？ ということだ？ 音的には銃器とかじゃねえけど……能力者って確証もたねえと右手も使えないし……）」

その間にも、何かが発も飛んできていた。その全てはデタラメに

射疾されているのだろう、見当違いなところばかりが当たっては挟
られを繰り返していた。

「（一発目以外は全部適当か……：こつ玉切れが無い辺り、やつぱ
相手は能力者だな、でも何の能力者まではわかんねえ……）」

今尚、ゆでだこのような美琴を無視し、上条は1人策を考え始めて
いた……。

φφφφφφφφφφ

side 一方通行

『グループ』を乗せたキャンピングカーは、ある施設を目指して進
んでいた。

とある研究所で、どうやらある実験が学園都市に取って危険な因子
になりえると判断されたのか、研究所の制圧、研究資料の破壊が今
回の指令だった。

「今回の仕事は楽だ、すぐに終わらせて、さっさと帰ろうぜ」

サングラスにアロハシャツの上から学生服を着た軽薄そうな少年、
土御門元春のその言葉に、黒曜石を徹底的に磨いて作られたナイフ

を持った茶髪の青年、海原光貴が質問する。

「果たして、僕らを召集させておいて楽に終わる仕事になると思いますか？」

「多分ならないでしょうね、でもまあ、骨が折れるにしろ何にしろ、さつさと終わらせちゃえば早く帰れるでしょ……」

と、海原の言葉に胸をさらしで巻いたツートールの少女、結標淡希が軍用のペンライトをバトンのように回しながら応えた。

「何にしても、さつさと終わらせて、音姉の作った晩飯食べたい……」

「ハッ！シスコン野郎がア、テメエは犬の飯で十分だろうがア」
ダルそうな少年、鍵原貴路の言葉に一方通行は興味なさそうに言葉を吐き捨てた。

「おまつ、音姉の飯食ったこと無いからそんなこと言えんだよ、今度食べに来い！」

誰が行くかよオ……と言って、一方通行はひとりで占拠している座席に横になり、到着を待つことにした。

φφφφφφφφφφ

side 貴路

海原からのメール通り、いつもの待ち合わせ場所である公園からキヤンピングカーに乗って、かなりの時間が経った。

恐らく時間なるべく遅くするために遠回りをしているんだろう。

だったら待ち合わせ時間自体を遅くすりゃ良かったのに、などと文句を垂れても何もかわらないことはわかっていたから、俺はゆっくりとため息をはいて、隣に座る土御門を見る。

「にゃー、しっかしカギヤンが『グループ』の新メンバーに入ってくるなんて思いもよらなかったゼイ？」

「俺だって、まさかあの土御門がこんな裏の組織に加わってるなんて、思ってもいなかったけどな？」

「でも、彼が来て随分と僕たちの雰囲気も変わりましたね？」

「そうね、前みたいな重い空気なんて全然だし。」

「…………ケツ、馴れ合いなんてクソツタレがすることだろうがア…」

「なんて言つて、ちゃんと会話に入ってくる辺り、一番変わったのはアナタですよ？一方通行？」

海原のその言葉を聞いて黙り込んだ一方通行は、黙って海原が座る席を蹴り飛ばした。

ホント、入ってきたばかりの時より、ここの雰囲気は柔らかいモノになっているのがわかる。

キャンピングカーが不意に止まる。

どうやら目的地に着いたらしく、俺たち『グループ』は、車を降りて、攻略対象であるその研究所を一斉に見上げた。

第8話 それぞれの思い Each | Feeling (後書き)

今回から読み始めた方ははじめまして
最初からの人はお久しぶりです

とりあえず、急展開すぎてワロタww

『グループ』の登場にまさかの主人公が裏の組織に……

とりあえず、かおす・ふぁんたずむの表の主人公は上条当麻と今は
空気のキョンくんとルルーシュ、裏の主人公に一方通行と浜面仕上、
両方面にオリ主とかなりのごったごたww

いざなぎの中では多分この6人の主人公たちがもつともベストで、
全員が交錯したら面白いだろうなと思います。

でもまだキャラは増えると思いますww今回はわかる人しかかわから
ない『グループ』という組織の登場でしたし……

浜面は絶対に出したいです

だって好きなんだもん↑

19巻での麦野との二戦目は鳥肌が立ちました。それくらい浜面が
大好きです。

さて、今回も相変わらずグダグダでしたが、これからも『かおす・

ふぁんたずむ』をよろしく願います

3月20日 いざなぎ（不幸K）

第9話 始まりの夜／激闘は続く

side 上条

「うおおお！」

乱射されていた先程までとは違い標的を捉えた弾丸は凶弾へと変わっていた。

だが、上条当麻はただ右手を盾にしその全てを無力化する。

とは言ったものの実際には致命傷になりそうなところだけ防いでいる上条の体は限界に近づいていたのだが……。

φφφφφφφφ

side 貴路

「ふうーん、やっぱり普通の研究はしてなかったか……【メダル】を使った何かの実験をしてたらしい…か、あのビリビリが喜んで食らいつきそうだな、これ。」

机に乱雑に置かれた1枚の資料を拝借し、中身を見てみたが読めば読むほど興味深い話だ。その【メダル】は【コア】と【セル】の二種類で構成されているらしく、この研究所では【セルメダル】を研究対象にしていたらしい。

【セルメダル】を使った様々な機械をこの場所で精製、地下の実験所で使用したが被験者はその絶大な力に耐えきれず重症を負った。

そして【セルメダル】の精製のされ方についてだが、【欲望】とグリッド が親密に関係している…、と資料には書かれてるけど。

「グリッド？」

俺は聞き慣れない単語を何度も復唱してみたが、思い付くものは何も引っ掛からなかった。

「少しだけ、【学園都市】の内部が見えてきたか…」

俺は数枚の資料と、机に置かれていた【タカ】の姿が描かれた紅い【メダル】と、【トラ】の顔が描かれた黄色い【メダル】と、【バツタ】の顔が描かれた緑の【メダル】をポケットに突っ込み、出口へ向かった。

φφφφφφφ

side 一方通行

カッソカッソと杖をつきながら歩く様は、まるで初老の男性の様だが、彼はまさしく【学園都市】1位の超能力者で、天使ちゃんまぢ天使なわけだが。

「ワケわかンねエーことを、ごちゃごちゃうつせエーンだよ、アア？」

どうやら電話が来たらしく、その対応をしているようだが、終止頭を抱える学園都市1位。

「だからだから、今日の御夕飯ははなまるハンバーグかアナタの名前をケチャップで書いたオムライスにするのかって、ミサカはミサカはアナタに聞いてみたりしてみたり？」

「ンなどうでもいいことをワザワザ聞いてくんじゃねエ！つか、オレは確実にマナーモードで締まったのに何で着信音になって、しかもテメエの好きなクソアニメの着信音だったぞ！？」

そう、彼が絶対にしないであろう【まじかる カナミン】のOPが彼の携帯から鳴り出し慌てて携帯を取り出したのだが、電話の主が主だったので犯人検索はすぐに終わったのだ。

「ええ〜！？ミサカからの愛のメッセージはアナタには届かなかったのね、なんてミサカはミサカは大袈裟なりアクションをしてみたり〜——というかアナタはちゃんとミサカの好きなモノを知ってくれてたんだね、ってミサカはミサカはなんだが嬉しくなったので跳び跳ねてみたり〜」

電話主である少女——打ち止め ラストオーダー は、アンチスキルの黄泉川 愛穂の元で一方通行と共に御世話になっている、クロインの少女だ。

詳しい話は追々されるだろう。

「ケツ、様がねエーなら切るぞ？」

『待つて、最後に一つだけ確認したいことがある、ってミサカはミサカはアナタに聞きたいことがあるのを伝えてみたり』

「アア？何だよ？」

『今日はちゃんと帰ってきてくれるよね？また、一人で何処かに行ったりしないよね、ってミサカはミサカは不安だから…』

いつもの強気な姿勢など、いまの少女の言葉の何処にも存在はしない。

儚げで触れれば壊れそうなくらい弱々しくて。

「黄泉川にオレの分のメシの準備もさせとけ、あと炊飯器じゃ肉は焼けねエってこと教えとけ」

そういつて電話を切ると、クルリと反転し出口へ向かう。
その姿はかつての独りの一方通行ではなく、自らの帰りを待つ者の
為に帰るべき場所へ向かう者だった。

第9話 始まりの夜／激闘は続く（後書き）

まずは様々な人々に謝罪を申し上げます。

長い期間をほったらかしにした末に、第9話は書き直しさせていただきました。

理由には、新ライダーが始まってしまったことや他の2人にも書きやすいようにしたかったからなどがあります。

改訂前の9話をみてくださった読者様には申し訳ないですが、これから【かおす・ふあんたずむ】をよろしくお願いしますorz

最後に一言、一方通行まちで一方通行↑

【このIDじゃ】だぶる・ふぁんたずむ 予告【書かないZ E】（前書き）

今更とかいわれても、めげない
↑

【このIDじゃ】だぶる・ふぁんたずむ 予告【書かないZE】

「なあキヨン、悪魔と相乗りする気あるか？」

ある日、親友の1人である『上条 当麻』からそんな一言を告げられた。

おいおい、冗談だと思ってるだろ？俺だって思ったかつたさ？でもな、『世界』には『アイツ』以上に変なのはいっぱいいるんだ、そう思い知ったのさ俺は……

「さあキヨン！今巷で話題の【溶岩怪人】を探しにいくわよ！」

「…………アレは間違いなく【異常】、私にも対処できない。」

「すみません、僕の力ではアレには敵わないようなので。」

「ふえ〜、私聞いてませえ〜ん……」

「やれやれ…………いくぜ、当麻？」

「わかってるって、相棒……」

【サイクロン】！

「さあて、メモリブレイクといきますかあ！」

【ジョーカー】！

「「変身！！」」

【サイクロンジョーカー】！

奏では【切り札】と【疾風】の二重奏
今、新たな英雄が誕生する！

「「さあ、お前の幻想^{つみ}を数えろ！」」

記憶と科学と魔術が交差するとき、上条 当麻とキヨン（本名不明）
の物語が始まる！

とあるシリーズ×仮面ライダーW×涼宮ハルヒシリーズ他作品多数
！！

かおす・ふぁんたずむ外伝、だぶる・ふぁんたずむ！
近日連載開始！！

【このIDじゃ】だぶる・ふぁんたずむ 予告【書かないZE】（後書き）

文句がある人はいざなぎに直接お願いしますorz

本編更新しないでまさかの外伝発表↑

作者は好きだからいいけど、今更「W」ってやっぱりアレかしら？
それらに関する御指摘、または意見などお待ちしてます。

もしかしたら劇場版だけの書きちゃうかもしれないです。

あと、この前の話が微妙に変わっています。

最後になりましたが、あけましておめでとうございますorz
今年こそは更新がんばりたいです……（いざなぎはブレイブルーで
南半球と銀さん（ラグナ）を練習するのでいっぱいいっぱいな社会
人です↑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8840j/>

かおす・ふぁんたずむ

2011年10月6日17時51分発行